The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	<書評>中嶋朝子著「被服造形学」光生館, 1973年
Author(s)	元井, 能
Citation	デザイン理論. 1973, 12, p. 99-101
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53725
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

書評

中嶋朝子著
「被服造形学」
光生館，1973年

被服についての考察を過去の人たちは全く手がけなかった，とはいえないにしても，人間にとってもっとも身近かな存在である被服については，建築ほどに論じられることは少かった。その理由の一つとして，身近かな存在であるだけに，つきはなして観察することの困難，きわめて柔らかい存在でありながら案外に堅固にして難解な諸問題を内包するものであるからともいえよう。このような近づき難い諸問題をかかえる被服について，被服造形学という立場から解明を試みられた中嶋朝子氏に，同じ道を歩む者として讃辞を呈したい。とはいうものの，書評という最も厳正な立場から以下述べなければならない責任を負っている。

まず，全般的な問題として本書の構成を示すと，被服造形学序論と被服造形学の課題とに分けられている。約120頁の内容のうち，序論の部分は約10頁であるから，後者の課題の部分に重点がおかれていることであろう。しかし，序論のII，着衣の動機，III．被服の成立と意味，の項目がなぜ序論の部で取扱われたのか疑問に思える。被服造形の課題として取上げるべき問題でもあろう。ただ，善意に解すれば，やはり序論の項で，被服全般について視野を広げておこうとされたからであろうか。

さて，本論の被服造形学の課題は次の五つの章に分かれている。

I．被服造形は被服の成立根拠に規定される

II．被服造形は歴史的・社会的事情により制約される

III．被服造形の自由性と芸術性

IV．被服造形と技術

V．被服造形の基本的理念

これら5つの章（著書では章という字は用いられていないが，便宜上そのように呼ばせてもらう）がほぼ同様の頁数ではなく，第1章の「被服の成立根拠」に過半がさかれている。頁数の多いということが必ずしも問題の重要性を意味するとは言えないまでも，やはり，読者としては量の多いということで重要性の密度が示されていると見ることは許され

よう。又，私自身も第１章については，別の意味から重要な問題点を含むものと受けとっている。

そのことは，著者自身の研究の足どりとも関係をもつ事柄であり，且つ，この著書にしか出来ない独特の研究方式，乃至は研究対象の把捉の方式であり，私自身も著者のこのような研究方式については双手をあげて賛同し，尊重するところである。というのは，学問研究の分野が，専門化すればするほど，隣接した研究分野においてすら，超えがたいほどの障壁，国境が設けられていることが多い。それは人文科学の場合にも言いうることであるが，自然科学の領域において，より容易に見出だされる事柄であろう。学問領域の専門化は，より精密，厳正な学問を求めるための避けがたい面であろうが，その裏側には巨視的な視野を見失うやも知れない危険な陥穴が待ち受けてもいる。

著者の被服造形学の確立を目ざしている根底に，如上の危険を最大限回避する道として，自然科学的立場からと人文科学的立場からの解明が試みられていることは，今日求められる緊急にして，正当な道といえよう。

自然科学的立場からの被服造形への考察は第１章の(1)「自然的生理的条件」が受けもち，(2)の「社会的心理条件」，(3)の「技術的条件」に人文科学的な立場からの考察が述べられている。

自然科学的考察の項については，私自身門外漢であるから，示された数式や数値についての批判は不可能であることを告白しなければならない。したがって，素人的な発言に終らざるをえないが，例えば，被服の保温力の個人差の問題についてのデータはどのように考えるべきか，自然的条件と社会的条件とのからみ合いの問題に至る道への暗示にふれてもらうわけにはゆかないものか，などの疑問が生じる。とはいうものの，それは専門外の者が求める過剰の願いともいえるかもしれない。

(3)の「技術的条件」について，ここでは自然科学的考察の方法に当然考えが及ぶのにその点を何故避けて通られたのか，と思える。

第１章の(2)「社会心理的条件」以下についてふれなければならない。第１章の(2)からと第２章においては，Flügelの「The Psychology of Clothes」によりながら論旨を展開されていることは著者自身の述べるところである。とはいうものの，被服造形における，流行の問題を重視して取りあげられたことは著者の研究に対する正鵠な，すぐれた洞察力の結晶といえよう。それだけに，(二)の被服の流行現象の分析は私にとっては蛇足のように思えてならない。被服造形における結語として，アランの言葉の引用のあと，「被服の流行もこの一見矛盾する心理の平衡を維持しつつ変化してゆく。」という言葉で終っていただきたかった。分析の項を補足（？）の意味で述べられようとした企図はわからないでもない

が，順序として，後にあることは軽くあつかわれているとは考えがたく，分析のあと総合と，順序にしたがった方が論理の展開としては強力となるのではなかろうか。

第3章，第5章について，あるいは著者は私の見解を強く求めておられるやも知れぬが，私はその論点に何らの異を差しはさもうとはしない。むしろ，第4章の「被服造形と技術」に異論をとなえたい。著者自身第4章の冒頭で述べられている条件として規定される技術と，p. 109の10行目の「基本的な問題」との間に，技術に対する意味の相違を感じるのである。被服のみならず，あるいは被服造形のみならず，今日の技術は多くの学者によって，一つの解釈が示されている。それは個々の技術の事柄，技術が産みだした現象，技術に関する具体的事実ということでなく，技術の本質に関わる問題としての取り上げ方であり，本質に関する問題提起であった筈である。(2)で述べられている「人間工学」とは次元の異なるところで論じられている。この点に関して，私自身十分な理解の足りなさを反省するだけに，十二分の準備を求めたいと思うのは筋ちがいであろうか。

最後に2，3の小さな点を申し添えるならば，①p.67の中ほどから始まる Flügel の引用の終りのカッコがない。②p.57の表21中の十二脂腸とあるのは十二指腸である。③p.115の下から二行目，「村上氏はリードの言葉を引用し」の「リードの言葉」は不用のように思われる。④また問題点として，IIの「被服造形は歴史的・社会的事情により制約される」の制約という言葉を一考してほしい。

京都市立芸術大学　元井　能